
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 89

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1761. 破壊衝動と自己と他者
- 1762. 精神の変容と変調、そして夢
- 1763. 流れ行く雲の味わい
- 1764. 異邦人から異星人になる日
- 1765. メロディーのアイデンティティとしてのリズム
- 1766. 幸福感の絶対条件と孤独について
- 1767. 還元化と分断化の波
- 1768. 全ての人が向かう場所:赤ん坊を宿す夢
- 1769. 刹那の切なさ
- 1770. 魂を支える景色と優れた楽譜
- 1771. 時間感覚と人生観・死生観
- 1772. 昨日の日記について
- 1773. 学びと美
- 1774. 日々の探究量について
- 1775. 少人数教育の恩恵
- 1776. 反復と差異と美
- 1777. 過ぎ去った閃きと創造学習
- 1778. 成績評価に関する夢と言語空間の柔軟な変化
- 1779. 創造行為を通じた学習について
- 1780. ミヒャエル・ツシヨル教授の指導より

七時前を迎えても、辺りは一向に闇に包まれている。書斎の窓の近くにある暖房のスイッチを入れ、窓の外から闇に包まれた景色を眺めていた。このような闇の中、目の前の通りを自転車を漕いでどこかに向かっている人たちの姿をちらほらと見かけた。人々は今日も何かを考え、何かを感じながらどこかに向かい、この日を過ごしていくのだろう、と思った。

昨夜の自分の中で姿を現した破壊衝動について、もう少し考えを深めておきたいと思う自分がいた。考えを深めるというよりも、その破壊衝動と最も適切な形で向き合う方法は何かということと、そうした衝動の根元を特定することに関心が向かい、それらの二つの点を明確にしておきたいという思いが湧き上がった。

破壊衝動に対して、頭の中で言葉を用いてそれと向き合おうとすると、いとも簡単にその衝動に飲み込まれそうになる。そうした状況を防ぐために、破壊衝動そのものを静かに文章の形にしておくという方法が思い付く。破壊衝動の姿の一端を掴むだけでもいいので、文章による可視化を行っていくのである。

こうした破壊衝動は、内側で形にならない状態で眠っていればいるほど危険なように思えてくる。そのため、破壊衝動から伸びてくる触手でもいいので、それを捕まえて文章の形にしていくというのは一つの方法だろう。昨夜はそれを文章にすることをせず、内側の世界の中でそれと向き合おうとしていたが、その代わりに、いやそれが影響して、作曲中の曲の中にそうした破壊衝動が形になろうとして姿を現した。

昨夜に取り掛かっていた曲の冒頭に、破壊衝動の一端が姿を見せたのである。そのまま破壊衝動に委ねる形で曲を作ろうとするのがいいのかわからず、理性がそこで働き、破壊衝動の響きの後に、急いで逃げるかのように空に羽ばたいていく小鳥を彷彿させるような音を生み出している自分がいた。見方を変えれば、それは破壊衝動の抑圧であり、破壊衝動からの逃避に見えた。どうやら自分には、破壊衝動を抑圧し、それから逃避しようとする自分がいるらしい。

そういえば、普段聴いている曲のほとんどは、この世の美的な側面を表現しているものがほとんどであり、破壊衝動が表現された曲が少ないことに気づく。それはクラシック音楽というジャンルの限界

だろうか。仮にクラシック音楽が、人間の持つ破壊衝動に蓋をする形で存在しており、それを表現することを良しとしない思想を持っているのであれば、これほどつまらない音楽ジャンルはないように思える。

究極的な美の世界と対極にある究極的な破壊の世界を骨抜きにしてしまってはならない。クラシック音楽の中で、そうした世界を描いている曲にはどのようなものがあるだろうか。それを探してみる試みに着手したい。

昨夜に曲を作りながら、文章にその人の人柄や存在そのものが滲み出すのと同様に、曲の中にもそれらが滲み出すのだとつくづく思った。人柄や存在のみならず、その時の精神や身体の状態が如実にそこに現れる。やはり作曲は、日記を書くように実践することが自分には合っているようだ。

精神や身体の状態、それは存在の揺れと形容できるかもしれない。日々揺れる存在の姿をこの世界に投影し、それを記録するかのように曲を作っていく。他人から賞賛されないような曲を作っていく。他人に向けて曲を作らない。なぜなら、曲は日々揺れる自分の存在の記録に過ぎず、自分の中で作曲とは、そうした記録を行うための実践としての価値を持っているからである。

自分の内側に、他者が歪曲した形で存在し続けていることを見て取ることができる。自己と他者の問題はひどく難しい。2017/11/10(金)07:22

No.406: Merge of Science and Art

I finished today's work before dinner. I just submitted the overview of a research plan to my advisor. Since I completed tasks to do today, I will spend the rest of time to read whatever I like. I picked up two books; one is about systems science, and the other one is about network science.

I will not utilize network science perspectives for my new research, but I will apply systems science perspectives to it. After I take a brief look at these books, I will carefully read a book of

paintings of van Gogh. Science and art merge in my daily life in this way. 18:36, Thursday,
11/23/2017

1762. 精神の変容と変調、そして夢

以前に想定していたよりも早く、過酷な冬に固有の精神状態と向き合っている自分がある。本格的な冬はこれからだというのに。

精神が変容することと精神が変調することの差。それについて考えていた。

どちらも共に精神の「変化」であることに変わりはない。片一方は、精神が変容し、新たな精神が生まれる。もう一方は、精神が異常をきたし、精神が死滅する。その差は一体なんだろうか。そして、そうした差はどこから生まれてくるのだろうか。

今から五年前、サンフランシスコの坂道を下っている時に降りてきた啓示的な気づきについて思い出す。それは、正常さと異常さという間には、実は薄皮一枚のものも存在していないという気づきだった。つまり、正常さも異常さも隣り合わせに存在しているということだ。精神の変容と変調も、同じような話として認識すればいいのだろうか。

一つの現象を予期することと、その現象の最中でそれを経験することの差は極めて大きい。冬がやってくる前に、「今年の冬も何とか乗り越えていけそうな気がする」と述べている自分がいた。しかし、存在に訴えかけてくるその厳しさを前にした時、話はそれほど単純ではないことに気づく。厳しいものは厳しい。過酷なものは過酷である。

異常なものを完全に異常なものだとみなせた瞬間、正常に転じるというような現象は起きてくれないだろうか。いつもそれを期待する。異常なものと正常なものが隣り合わせになっているのであれば、それは十分に可能だと思うのだ。

存在の克明な記録。隣接した対極を揺れる存在の歩み。そうした歩みを絶えず記録していくこと。生きることは存在証明の試みであり、生き続けることが生きることの最後の拠り所になるのでは、という思念。

昨夜は、非常に心踊る夢を見た。夢の中で私は、日本で最もフリーキックの巧いサッカー選手と対談する機会を得た。私が以前から気になっていた質問をいくつ投げかけても、その選手は嫌な顔一つせず、むしろこちらの質問を楽しんでいるかのように、洞察に溢れる回答をしてくれた。

予定されていた対談の時間を大幅に過ぎても、二人の対話が止むことはなかった。二人は意気投合し、対談後、その選手から非常に有り難い提案を持ちかけてくれた。それは、毎日の練習の後、30分間ほどサッカーの指導をしてくれるというものだった。とりわけ、フリーキックの技術について教を請いたいと前々から思っていたため、その30分の指導の時間は全てフリーキックの練習に充ててもらおうようお願いをした。

この有り難い提案を最初に耳にした時、私の心は踊っていた。しかし、毎日練習場に通い、30分間の練習ができるのかどうかを懸念している自分がいたのは確かである。そうした懸念を脇に置き、その翌日に練習場に足を運び、30分間の指導を受けた。

指導の最中にも感じていたが、フリーキックの練習というのは科学的な実験に他ならないのだということに気づいた。つまり、フリーキックの練習も科学的な研究も、両者は共に仮説検証の実践であるということだ。

ゴールまでの距離を20数メートルに設定し、向かってゴール右上の角に決める練習を開始した。私は右利きなのだが、その選手が左利きということもあり、私も左足で練習をすることにした。私はその方に、最初に手本として何度か実際にフリーキックを蹴ってもらうことを依頼した。依頼の際に、壁を超えた瞬間はキーパーの方に向かっていくかのように見え、壁を超えてから急速にボールがキーパーから離れていき、それがゴールの右隅に決まるようなボールの軌道を描いて欲しいと注文を出した。するとその選手は、笑顔を見せながら、本当に私の注文取りの軌道を描くフリーキックを決めた。そこで私はさらに、もう少し細かい注文を出した。

私:「壁を超えた瞬間のボールの高さを3cmほど上げてもらって、そこからゴールの右隅に落ちていく傾斜角度を4度ほど強くしてもらえますか？」

このような注文をした背景には、自分の中で徐々にボールの軌道のイメージが出来上がっており、それをより緻密なものにしたいという思いがあったからである。私の細かな注文に対しても、その選

手は何一つ嫌な顔をせず、むしろ私の注文を歓迎してくれるかのように、またしても注文通りのキックをしてくれた。その後も、私たちはあれこれとフリーキックという一つの技術に存在する無数の理論仮説を共有し、30分の時間はあっという間に過ぎた。夢から覚めた今も、あのボールの軌道が脳裏に焼き付いている。2017/11/10(金)08:08

No.407: Sketch-Like Music Composition

I want to compose music at a faster pace. Like a painter sketches, I need to compose music as naturally and quickly as possible, which might be called sketch-like composition.

Van Gogh continued to make a number of preparatory drawings for practice. Emulating van Gogh's daily practice, I will do sketch-like composition to represent my daily experience.

The embodiment of my thoughts and emotions in a daily life is foremost important for me. I do not intend to make a large piece of music, which is contradictory to my purpose of music composition. Music composition for me should be equal to keeping a daily journal. 19:45, Thursday, 11/23/2017

1763. 流れ行く雲の味わい

昨夜から今朝にかけて精神にまとわりついていたものがずっと消えていった。一日が静かに過ぎ去っていくのと同じような形でそれは過ぎ去っていった、あの破壊的な衝動は一体何だったのだろうか。

夕方、食卓の窓から見える通りを一台のバスが過ぎ去っていった。それを見て、昨夜から今朝にかけて自分の内側にまとわりついていた破壊衝動について考えていた。こうした衝動は、おそらく生物としての人間が太古から持ち合わせているような情動だと思った。古の感情を取り戻すかのように、昨夜から今朝にかけてはそうした太古の情動の中に私はいた。しかし、決してそれと向き合っていたわけではなく、自分の理性の半分がそちらに飲まれているような形であったと言える。

今日も仕事のはかどり、合わせて自分の関心に沿った旺盛な読書をする事ができた。さらには、最終試験から解放されたこともあり、作曲に充てることのできる時間が増えたことも充実感をもたらしている大きな要因だろう。今日の自分の内側の感覚を観察していると、一日のうちに三時間ほど作

曲に関することに従事することができればそれだけでもう十分だ、という気持ちになる。それ以上に多くの時間を充てるのは、作曲を本業とする者だけでいいだろう。

現段階では、実際に曲を作る時間は就寝前の一時間だけにし、仮にその他に時間を作ることができたら、残りの時間は作曲理論や音楽理論を学ぶ時間に充てている。今日は午後にそうした学習の時間を設けることができた。

曲を実際に作るという実践と実践を根底から支える理論を学んでいくこと。これら二つはどちらも欠けてはならない。それら二つが両輪となって初めて、自分が表現したいことを徐々に曲として形にしていくことができる。夕食までの時間、そして夕食後しばらくは、再び作曲理論の学習に時間を充て、その後は来週から始まる新たな学期に履修するコースの課題論文を読もうと思う。

午後の五時半を迎えると辺りはもう真っ暗となった。実は五時前に一度闇に包まれ、随分と日が沈むのが早くなったものだと思っていた。その時はどうやら、びっしりとした密度を持つ黒い雨雲が空全体を覆い、闇の世界を生み出していたようだった。まさに一縷の隙間もないほどに雨雲が空全体を覆うと、このような闇を生み出せるのだと感銘を受けた。

その後、雨雲の大群がゆっくりと過ぎ去っていき、移動した隙間からライトブルーの夕方の空が顔を覗かせた。そこから私は再び仕事に取り掛かり、しばらくしてもう一度書斎の窓から見える空を眺めた。すると、そこにはネイビーブルーの空が広がっていた。

私は思わずその光景に息を飲んだ。同時に、生きる喜びの声がどこからか聞こえてきた。それは自分の内側から発せられた声だった。

濃く深い青色の空を、雲がゆったりと移動している。雲のゆったりとした動きを私はただ呆然と眺めていた。一つの呼吸に味わいがあるのと同様に、ゆっくりと進む雲を無心で目で追う楽しみを最後に味わったのはいつだったのだろうか、と考える自分がそこにいた。

透明な海の浅瀬から深い海へと入っていくかのような感覚がそこにあり、いつまでもその雲の動きと暮れ行く空を眺めていたかった。2017/11/10(金) 17:48

No.408: Eternity Resides in Our Work

All of us die someday. Yet, at the same time, we never die. Can you grasp this meaning?

It is true that our physical body will decay someday. However, what we have done as work lasts forever. Eternity resides in our work. It is the meaning that we never die. 20:33, Thursday, 11/23/2017

1764. 異邦人から異星人になる日

今年の年末年始に日本に一時帰国しようと思う。その目的は実家でゆっくりと過ごすことと、実家に届いている40冊ほどの和書を持ち帰るためである。寺田寅彦、永井荷風、川端康成、小林秀雄、福永武彦、吉田秀和の全集のそれぞれを何冊か購入し、それらをオランダに持ち帰る必要がある。

国外での生活において、無性に和書が読みたくなる瞬間が時折訪れるため、それらの和書は精神の肥やしであるばかりか、精神の癒しにもつながるであろう。

一時帰国するための航空券は、すでに夏の時期に購入している。日本に立ち寄る際にいつも利用している日本航空を今回も利用する。

先ほどメールを確認すると、日本航空から告知メールが届いていた。いつも私は日本に帰った時、携帯のWifiが路上で使えないことに不便を感じている。とりわけ、GPS付きの地図を携帯で確認することができず、このようなご時世にあっても、あまり馴染みのない場所に出かける時は、最寄り駅までの電車の経路を事前にPDFにしておいたり、最寄り駅から目的地までの道のりを手書きでメモ用紙に書いたりすることがある。

先ほど、日本航空からの案内メールを見たとき、日本に帰った時に様々な場所でWifiを活用できるアプリを見つけた。その案内文に、「訪日外国人向け」という文言があり、それは自分の内側で特殊な感情を湧き上がらせるのに十分であった。

日本人でありながらも、訪日外国人向けのアプリをダウンロードしようとする自分を眺めていると、欧米で生活をしていても異邦人、母国に帰っても異邦人であるかのような、なんとも言えない感情がそこにあった。

日本を離れて生活をするのはまだ六年しか経っていないが、その期間において、異邦人という感覚をめぐるいくつかの変遷があったように思う。全ての変遷過程を詳細に記載することは今は億劫であるため、単純に二つに分けると、まずは異邦人であることの「開放感」と「解放感」が初期の数年において自分の内側に存在していた。開放感と解放感という二つの感覚についてもここでは詳しく取り上げない。とにかく、欧米での最初の数年間においてはそうした感覚があり、それは時と共に別種の感覚に変わっていった。

今もそうした感覚の残滓はあるが、それよりもむしろ、異邦人性への諦念が自分の内側の多くを占めているように思う。もちろん、完全に諦念の境地に至っているわけではなく、諦念の隙間から郷愁や哀愁といった感情が漏れてくる。

先ほどのアプリの文言を見たときに、「もしかすると自分は訪日外国人かもしれない」という考えさえ生まれ得るような状態に今の自分は置かれており、ここにはまだ中途半端な異邦人としての自分がいることに気づく。

数年前から頻繁に襲われる考えの一つに、「違う星に住みながら仕事と生活を送る日も遠くないのかもしれない」というものがある。そうなれば、私は異星人として扱われ、日本に帰る際には、「訪日異星人」と括られるのだろうか……。

異邦人性への諦念の先に異星人性に関する問題と向き合い、異星人性への諦念が自分の中で生じる日は来るのだろうか。「異星人」という概念すらも当たり前のものとなり、それに変わる概念が現れることを待ち望む。2017/11/10(金) 21:15

No.409: Interdependent and Context-dependent Learning

Since yesterday, I have provided managers and executives in a Japanese company with a two-day training program. The focus of the program is adult development theory. I finished the program at

9AM today. Thinking back to the program, participants' comments and questions fostered my thoughts. It always occurs in a training program, but I recognize how profound it is.

Learning occurs through the interaction with others in the real context. Learning is interdependent and context-dependent. 12:19, Friday, 11/24/2017

1765. メロディーのアイデンティティとしてのリズム

穏やかな雰囲気漂う土曜日の朝。今朝は六時に起床し、六時半から一日の仕事をスタートさせた。

書斎の机に向かってすぐに漏れてきたのは、「穏やか」という形容詞であった。外見上、真っ暗闇に包まれた外側の景色を穏やかだと表現できるかは怪しい。外側の景色だけを見れば、それは穏やかというよりも、深遠な世界を体現している。

早朝から小雨が降っており、雨滴が窓ガラスにぶつかる音が聞こえてくる。その小刻みなリズムに耳を傾けながら、こうした身の回りに溢れる自然現象から作曲の着想を得て、さらには作曲の技術を磨きたいと思う自分がいる。

昨夜も作曲実践に取り掛かっており、小さなテーマとして抱えていたのはメロディーだった。いかに納得のいくメロディーを作っていくかについて、実験を重ねながら考えていた。そもそも優れたメロディーの特徴について自分なりの定義を持つておかなければ、自分でメロディーなど作りようがないと思った。

優れたメロディーにはどのような特徴があるだろうか。こうした問いを立ててみた時に、すぐに多くの回答を述べることができない時点で、メロディーという概念かつ現象についての考察の浅さが露呈する。優れたメロディーの特徴の一つとして、印象の余韻の強さを挙げてみるのはどうだろうか。言い換えると、それは思わず口ずさんでしまいたくなるようなものであり、記憶に残るようなものである。厳密には言えば、思わず口ずさんでしまいたくなるものと、記憶に残りやすいものというのは異なるかもしれない。後者の特性を持たせるのであれば、メロディーには反復性を持たせることが重要に

なるだろう。わずかばかりに差異を持たせながらも、反復性という音楽に不可欠な要素を活用してメロディーを作っていくのである。一方、前者の特徴についてはどうだろうか。

思わず口ずさんでみたくなってしまうというのは、もしかするとリズムと関係しているのかもしれない。先日から取り掛かっている作曲理論の専門書の中に、「リズムとはメロディーのアイデンティティである」という記述があったことが印象に残っている。これはつまり、リズムとはメロディーの核に当たるものであり、リズムを変えるとメロディーの印象がガラリと変わるということを示唆している。思わず口ずさんでしまうようなメロディーは、アイデンティティに光るものがあり、それはすなわちリズムの輝きに置き換えることができるかもしれない。

そこで再び、リズムの輝きを掴み、印象に残るリズムを生み出していくためにはどうしたらいいのだろうか、ということを考えていた。もしかすると、一つのヒントとして、今も降り続けている雨のように、自然現象にリズムの規範を求めてみるというのもいいかもしれない。

日々の生活の中で何気なく遭遇する自然が奏でるリズムに耳を傾け、それを曲の中に活かしていくのである。もう一つは、やはり優れた曲の楽譜を参考にすることが挙げられる。

メロディーにはリズムという要素が包括されており、その逆は成り立たないため、メロディーを学ぶことはリズムを学ぶことに他ならないのだが、あえてリズムだけに焦点を当てて楽譜を眺めてみるというのは一つの実践方法かもしれない。音階の高低に着目するのではなく、音符の種類や配列だけに着目し、分析対象となった曲の複数の小節がどのようなリズムになっているのかを掴んでいく鍛錬をしていくという方法だ。

印象に残るリズムについて、もう一つ書き留めておきたい特徴がある。優れたリズムを持つ曲は、身体と存在の中に深く入り込み、両者を揺らす。つまり、そこにあるのは、身体を躍動させるようなリズムであり、存在を打ち振るわせるようなリズムである。そのようなことを考えてみると、身体と存在と共鳴し、両者を揺らしてくれるリズムが優れたリズムであり、そうしたリズムを持っていることが、優れたメロディーの一つの要件なのかもしれない。

外側の世界ではなく、内側の世界に広がる穏やかさ。起床直後に感じていたのはそれだった。穏やかさの中にある固有のリズムとメロディーを感じながら、今日もなすべき仕事に取りかかっている。
2017/11/11(土)06:59

No.410: A New Piece of Music

The development of a waltz requires a tremendous amount of spontaneous and extraneous efforts as human development does.

The weather of Groningen has been unstable for a while, and in fact, sporadic rainy days have continued. However, even so or that is why, a fine day is exceptional and marvelous.

A new piece of my music that applies a waltz accompaniment might represent the nature of the weather of Groningen. 14:54, Friday, 11/24/2017

1766. 幸福感の絶対条件と孤独について

一昨日の夜と昨日の早朝に、自分の中で小規模な揺れが起こっていた。その揺れが今は収まっていることが、内側の世界の穏やかさにつながっているのだろう。

今日は朝からとても調子が良い。だが、心身に充実感がみなぎる形ではない。なぜなら、心身が充実感と一つであれば、充実感などみなぎりようがないからである。これは情熱についても当てはまる。仮に自らの存在が情熱と不可分であり、情熱そのものであれば、情熱などほとぼしらない。情熱として生きることの絶対的な静かさだけがそこにあるはずだ。

私がこの瞬間の状態を「穏やかだ」と言っているのは、そうした様子を描写しているように思える。充実感と情熱感と一体となって日々を送る生活。それは幸福感と一体となって日々を生きることにつながる。幸福感というものを外側から内側に向かって獲得しようとするのではなく、自己が幸福感そのものになり、自分は幸福感に他ならないという気づきこそが、真の幸福感の絶対条件の一つではないだろうか。

真っ暗な外の世界のどこかで、小鳥が小さくさえずっている。そのリズムは、「タタタ タタ タタタ タタタ」という形で抽出できる。抽出されたリズムの配列だけを眺めていても、一切喚起されるものがないかもしれない。リズムの抽出化を済ませた後に、いかにそこに生命を吹き込んでいくかを作曲上の一つの課題としたい。

論文や小説を執筆するのと同様に、物語の中にリズムを組み込み、一つの文脈の中でリズムの意味が初めて湧き上がるような工夫を凝らす。音楽においても、物語性、さらには文脈性という要素が重要になる。

わずか数行であったが、作曲について少しばかり考えを前に進めてくれることに貢献してくれた小鳥がどこかに行ってしまった。

雨水の残る車道を走る車の音が聞こえてきた。そのリズムは一定であり、一聴するとそれは単調でつまらない。だが、よくよく耳を澄ませてみると、曲の中のどこかで活用できるリズムであるように思えてくる。ある一点から別の一点へ直線的に流れていくリズムとしてそれをイメージ化することができる。

道行く車も去り、再び世界が静寂な朝となった。小鳥も車も去ってしまい、私は一人になった。しかし、私の周りには常に「他者」と「多者」が溢れていることを忘れてはならない。他者と多者から学ぶことはいついかなる時においても可能であり、彼らから存在を深める洞察を得ることはいついかなる時でも可能なのだ。これは一つの観点からすれば朗報である。だが、私はすぐに真逆の観点からそれらの有り難さを捉え直した。

人間はどこまで行っても一人になれないのではないか、という思念がそこにあった。虚無的でもなく、自虐的でもない本当の孤独を人間が感じることは極めて難しい。真の孤独感、私たちの存在を深めていく。現代社会において、思っているほどに人間が成熟を遂げていかないのは、こうした真の孤独感を得られる機会がほとんどないからなのではないだろうか。

虚無的、あるいは自虐的な孤独感など不必要である。それにもかかわらず、この現代社会にはそうした孤独感が蔓延している。それらの孤独感の先にある真の孤独感を見つめなければならない。

2017/11/11(土)07:23

No.411: “Vincent van Gogh – The Letters: The Complete Illustrated and Annotated Edition (2009)”

The bell of my house beeped in the early afternoon. I answered it, and it seemed that a package was delivered to me. I ordered “Vincent van Gogh – The Letters: The Complete Illustrated and Annotated Edition (2009)” last week. The series of books contain six books and a CD. I expected it to be delivered next week, so I thought that the package was for someone else in the apartment. Yet, when I received it, the name tag indicated my name.

Without doubt, the large box told me that it was what I ordered and what I really expected to be delivered. Although I have purchased a couple of collected works of scholars and artists before, I think that this series of van Gogh’s books are the largest ones. The size and weight are massive, which perfectly corresponds with the degree of my expectation. I will carefully and thoroughly read the letters exchanged between van Gogh and his brother, Theo. Indescribable happiness has come to me. 15:25, Friday, 11/24/2017

1767. 還元化と分断化の波

昨日は作曲について考えている過程の中で、音楽が果たす重要な役割の一つに、小説が果たす役割と似たようなものがあることに気づいた。音楽も小説も、精神的なものをそこに体現させ、それを通じて世界に働きかけていくという重要な役割がそこにある気がしてならない。

小説家の辻邦生先生は、小説家になる前に、小説の持つ意味とそれが果たす役割を見つけられずに長らく苦しんでいた。辻先生が小説の中に見出した究極的な意味や役割は、小説が物質主義的なものを超え、精神的な物語世界の中に読者を誘うことを通じて、私たちの生活に直に働きかけていくことにあるのではないかと思う。

つまり、小説とは精神空間の産物であり、それを享受するのも精神空間の中でのことなのだが、小説は私たちの実際の生活に直接的な影響を及ぼす力を秘めているということだ。辻先生の師でもあった、小説家の埴谷雄高氏は、「真の革命とは精神的な次元でなされなければ意味がなく、小説はそれを成し得る手段である」という趣旨の言葉を残していた。

小説が精神に働きかける作用と、それが実際の私たちの生活に働きかける作用は見過ごすことのできない点である。そして、小説と同様のことが、音楽にも当てはまるのではないかと思う。音楽は物質主義的なものを超えたところにあり、私たちの精神へ直接的に働きかける。同時に音楽は、私たちの生きる日々の生活に直接的に働きかけるものでなくてはならないように思える。もちろんここでは、小説や音楽の「実用性」について述べているのではない。小説や音楽は、精神空間の中で営まれるものでありながらも、それが生活空間へと繋がっていなければならないということを言いたいのである。

米国の思想家のケン・ウィルバーが述べているように、物質圏と精神圏は別々のものでありながらも、それらは連続的なつながりを持っている。片方を一方に還元してはならず、同時にそれらを切り離してはならない。小説や音楽が物質圏に還元されてしまうことは大きな問題であり、同時にそれらが精神圏のみにとどまっているのも大きな問題である。

物質圏に還元されてしまった小説や音楽は、それらが本来依拠する空間から切り離されてしまっているがゆえに、本質的なものが骨抜きにされてしまっていると言えるだろう。同様に、精神圏のみにしか留まれないような小説や音楽も、精神圏と物質圏の連続性を無視することによって、それらが果たすべき生活への作用という本質的な役割を担うことができていない。

この世界は、本当に進歩しているのだろうか。私たちは、本当に成熟の方向へ向けて足を進めているのだろうか。それらについては強く疑いたくなることがある。この世界に蔓延する還元化と分断化の波を食い止める方法はないのだろうか。2017/11/11(土)07:55

No.412: Conviction

I convince myself that I can overcome the coming severe winter. Needless to say, the severity is not about physical coldness but existential demands.

While reading one of the collected works of van Gogh, I assured myself that the series of books would definitely bring me to next spring. 16:21, Friday, 11/24/2017

1768. 全ての人が向かう場所: 赤ん坊を宿す夢

今日の天候も昨日に引き続き変化に富む。薄い雨雲が空を覆っており、突然雨が降り始めたと思ったら、次の瞬間には雨が止み、晴れ間が見えたりする。その後、また雨が降り、同じようなことが続いていた。これだけ一日の天気めまぐるしく変わるというのは、北欧に近いこの場所に固有のことなのかもしれない。

天気的气まぐれさには驚かされてばかりだが、人間の気まぐれさはもしかするとそれ以上かもしれない。変化に富む天気を見ながら、それを人間と重ねて考察することができるというのは有り難いことなのかもしれない。

自然から人間について考え、自然から自分について考える。私たちは、自然から学んでばかりである。それでは、師としての自然に対して、私たちは恩返しをしているだろうか。仮に裏切りと背徳しかそこにはないのであれば、日々の行為一つ一つを見直さなければならない。

目の前に並ぶ赤レンガの家々。オランダの多くの家は非常に慎ましくていい。

これから夕方に向かおうとするフローニンゲンの空は、晩秋の物悲しい光を発している。光の力はとてもか細く、それは誕生したての太陽の原初の光、もしくは全く逆に、最後を迎えつつある太陽の灯火の光と形容できる。

昼食時に、食卓の窓から外を眺めると、通りを行き交う人たちの姿が見えた。ゆっくりと散歩をする人もいれば、自転車に乗って過ぎ去っていく人もいる。どの人も防寒着を着ており、さらには自分の目的地があることには変わりなかった。小さな子供が自転車に乗って過ぎ去っていく姿を目撃瞬間、いつか私たちは皆、各々の人生を終えるのだという共通性に突き当たった。

人は皆、どこかに向かって歩き、いつかその歩みを止める日が来る。全ての人は等しく人生の最後の日を迎えるということに突き当たった時、表現に絶する気持ちに襲われた。

笑顔で横の友人らしき人物に話しかけながら元気良く歩く老女。ランニングに精を出す筋肉質の男性。最近自転車に乗れるようになったのではないかと思われるような小さな男の子。携帯を手に持ちながら歩く若い女性。

全ての人たちは日々どこかに向かい、平等に最後の日を迎えるということ。そこにあったのは一種の儚さが引き起こす感情であり、無常さが引き起こす感情であった。言葉にならない感情がそこにあった。

昨夜は実に不思議な夢を見た。それは、妊婦の疑似体験をするというものだった。

自分のお腹に赤ん坊が宿っており、妊婦のための少人数制の講習会に私は参加していた。妊婦となって初めて気づいたが、赤ん坊がお腹の中にあることの重みは言葉で形容できないほどである。物理的な重さも確かにあるのだが、そこに新たな生命が存在していることに対する重みが極めて大きい。実感としては、赤ん坊と自分が一体となっている感じでありながらも、同時に違う生命がそこに存在しているという確かな感覚がそこにあった。

講習会中も含め、私は必要以上に神経質となり、激しい動きをして赤ん坊に衝撃を与えないようにしていた。自分のお腹の中にある赤ん坊が眠りから覚めたのか、突然赤ん坊が動き出した。

身体の中を別の生命が動いている感覚をどのように表現したらいいだろうか。これは経験した者にしかわからないことだろう。

元気良く体を動かす赤ん坊を、私はお腹の上から撫でていた。すると私は、少しばかり妙な吐き気に襲われた。この吐き気についてもこれまで体験したことのあるものとは異なっており、うまく表現することができない。私は、膨らんだ自分のお腹を撫でながら、赤ん坊が落ち着き、自分の吐き気が治まることを待っていると夢から覚めた。2017/11/11(土) 15:43

【追記】

上記の日記を読んだ後に、すぐさま続く英文日記の編集に取り掛かろうとしたところ、待ったをかけるような突然の気づきがあった。上記の日記は、自分が真に男性性と女性性を統合し始めた—あるいは統合を終えた—ことを示唆しているのではないかと思ったのである。

いったい何人の男性が、妊婦になる夢を見るだろうか。確かにそれは稀のように思える。この稀さは、単に性別上の不可能性のみならず、そもそも自分の内側にある男性性と女性性を統合することの難しさから生まれているように思えて仕方ない。

本当によくわからないのだが、上記の日記を読み終えた瞬間に、自分の中の男性性と女性性の統合が完了したように思えた。それはこの夢を見たときではなく、そこから一年以上たった今ここで起こった。フローニンゲン:2019/1/1(火)14:45

No.413: Importance of Conforming to a Principle

A principle is a principle. That is what Chopin's music told me yesterday.

In general, a waltz accompaniment is applied in three-four time. However, I tried to apply it in four-four time, which was deviation from the principle.

As expected, I confronted some difficulty. The difficulty educated me on the importance of a principle. I took a look at Chopin's music scores of waltz again, and I realized that all of them chose three-four time. Even Chopin conformed to the principle of waltz.

I will comply with the principle next time. To deviate from the principle will come way ahead.

07:46, Saturday, 11/25/2017

1769. 刹那の切なさ

先ほど自分が感じていたことはもしかすると、「刹那の切なさ」と形容できるかもしれない。全ての人が向かう共通の最終地点を思う時、その感情はやってくる。

人々は、その最終地点に向かうまで、日々自分のペースで様々な道を歩く。その全生涯に及ぶ過程は長いと言えば長いかもしれない。しかし、それはある意味刹那の長さである。私たちは刹那の中で生き、刹那の生をやがて終える。

私たちは、最小の時間単位である刹那を大切にしながら日々を生きているだろうか。「刹那の切なさ」という感情が生まれる背景には、ひょっとすると、現代社会の時代の要請によって、刹那の時間がないがしろにされてしまっているという要因を挙げることができるかもしれない。

刹那の豊穡さに気づくことができるだろうか。今この瞬間の刹那に起こっていることは、あまりに多彩であり、それを思うだけでめまいがしそうである。

先日私は、自分の存在が刹那の気づきによって構成されているという気づきを得た。自己とは何なのだろうか。それは一瞬一瞬の気づきの総体であるということを見せられたのである。刹那の気づきこそが自己を築き上げているということに気づかされた時、いったい誰がそうした刹那の気づきをないがしろにするだろうか、という思いに至った。

しかし、そうした思いとは裏腹に、現代人の多くは刹那の気づきに意識など払いはしない。刹那の気づきに無自覚であることは、自己に対して無自覚であることを意味し、刹那の気づきをないがしろにすることは、自己をないがしろにすることである。

この世界には、なんと多くの自己がないがしろにされているだろうか。それを思うと胸が苦しくなる。切なさを通り越し、暗澹たる気持ちになる。自己を見つけるというのは、刹那の気づきを見つけるということである。

私は、日々の充実感や幸福感とは、自己を見つめることの中でしか得られないような気がしている。自己の外側に充実感や幸福感を求めても、それらを得ることができないばかりか、虚偽の充実感と幸福感を掴まされるのが落ちだろう。

自己を見つめるというのは、刹那の気づきに意識を当てるということに他ならず、これは決して自閉的なものではないことがすぐにわかるはずだ。なぜなら、私たちの刹那の気づきは、自己を取り巻く全ての存在との関係によって生み出されているからだ。

目の前の赤いトマト、隣にいる家族、外を吹き抜ける秋の風、そうした存在者が刹那の気づきを育んでくれるのである。なぜそうした刹那の気づきを大切にしようとならないのか。そうした刹那の気づきを大切にしないのであれば、いったい私たちは何を大切に毎日を生きているのだろうか。刹那の気

づきを大切に生きていないというのは、それこそ自閉的かつ自傷的な生き方だと思うのだ。2017/11/11(土)16:06

No.414: Causal Patterns

I have recently learned causal inferences in a rigorous way. In fact, I have taken a couple of courses about this topic.

I am currently reading “Learning causality in a complex world: Understanding of consequence (2012).” The book introduces six main causal patterns that are beneficial to elucidate complex phenomena. I will finish reading it by the afternoon and read it again in my near future. 10:06, Saturday, 11/25/2017

1770. 魂を支える景色と優れた楽譜

夕方を迎え、秋の静かな空に夕日が沈んでいく。この時間帯は最も西日が強く、カーテンを閉めなければ、書斎の手元が明るすぎて仕事にならない。だが、カーテンを全部閉めてしまうと外の景色が眺められないので、いつも少しばかり空間を残してカーテンを閉める。

昨年の今頃は、ダイナミックシステム理論における「シンクロナイゼーション」という現象について、あれこれと考えさせられることが多かったと記憶している。今改めて思うと、私は目の前に広がる景色とのシンクロナイゼーションにどれだけ救われているだろうか。

私の存在の基底、つまり魂はいつも不動の構えを見せながら、それは遍歴を好むということは以前に書き留めた通りである。一方、存在の基底の上に存在する精神は絶えず揺れ動く。それを象徴してか、ここ数日間の自分の精神状態は揺れているようであった。

昨年この家にやってきた時、私は書斎の机の位置をすぐさま変えた。もともとは家の壁に面して机が設置されていたのである。数日間、私は壁に向かう形で仕事をしていたが、どうにもならない違和感がそこにあった。試しに、書斎の机を大きな開放的な窓の方向に向けてみると、なんとも言えない精神の高揚感と解放感を覚えた。それ以降、私はずっと外の景色を眺める形で毎日の仕事に取り組んでいる。

開放的な窓から視界に飛び込んでくる変化に富む光景は、私の精神をいつも励まし、いつも支えてくれる。もちろん、今日のように天気が目まぐるしく変化し、天気不安定性がないこともしょっちゅうある。しかし天気と同様に、その時の私の精神も安定性を欠いていたとしても、両者の不安定性がシンクロナイゼーションし、両者を共に均衡状態へと導く作用があるから不思議なのだ。厳密には、天気は私にシンクロナイゼーションしておらず、私が天気にシンクロナイゼーションしているのだろう。ゆえに、天気とのシンクロナイゼーションの恩恵を得ているのは私だけとなる。それを考えれば、なおさら目の前の天気とそれが生み出す景色に感謝をしなければならないだろう。

絶えず自然を眺めることができ、絶え間ない景色の変化と接することができるのであれば、私は自分の精神がいかに不安定になっても大丈夫だという絶対的な安心感がある。これからの人生において、もう二度と自然から離れることをしないでらう。

どんな小さな自然でもよく、どんなにわずかな形でもいい。絶えず自然と接しているということが、精神を安らかにし、それは魂に届く。魂の不動さと遍歴さを支える上でそれは不可欠だ。

夕日が西の空に沈む頃、休憩を兼ねてモーツァルトの楽譜を眺めていた。意識的かつぼんやりと過去の偉大な作曲家たちの楽譜を眺めることを習慣にしたいと思っていたところであり、モーツァルトの楽譜を眺めたことは大きな偶然であった。

絵画作品に魂を驚掴みにされ、その場に佇むことしかできない経験。音楽に魂を驚掴みされるというのも同種の体験であり、優れた楽曲の楽譜は絵画的であり、同時にその絵画作品に音が伴うため、より強烈な体験を引き起こしうることに気づかされる。

毎日少しの時間であってもいいので、優れた楽譜と接する時間を設けたい。良書や優れた論文と毎日接するかのように、優れた楽譜と毎日接していく過程を通じて、徐々に作曲に関して、さらには音楽に関して自分の理解を深めていきたい。

モーツァルトの楽譜の冒頭に、クレメンティに関する記述があった。その記述に引っ張られる形で、私は思わずクレメンティの楽譜を手にとった。だが、私はあえてその瞬間にその楽譜を開かず、明日それを開こうと思った。過去の優れた作家から文体を学んでいくように、優れた作曲家の楽譜か

ら作曲における文体を学び、自分の文体を涵養していくことにつなげていきたい。2017/11/11(土)
16:37

【追記】

上記の日記で指摘しているように、私は毎日窓の外を眺めながら十数時間を書斎の中で過ごしている。窓に向かって机を配置すると、外の景色が自分の思考や感情をより開放的なものにしてくれる。この習慣は、今後世界のどこに行っても続けていきたい。窓に向かって机を設置するという、そのシンプルなことを今後の生活実践として継続させたい。

記憶にある限りだと、ベートーヴェンがかつて住んでいた家、それからシベリウスがかつて住んでいた家に訪れた時、彼らも窓の外に向かって机を設置していたように思う。彼らもまた、外の景色を眺め、絶えず景色からの恩恵を受けて作曲実践に励んでいたのだろう。自然は靈感の母なのかもしれない。フローニンゲン:2019/1/1(火)14:57

No.415: Learning Causal Relationships from Two Books

As I planned, I finished reading “Learning causality in a complex world: Understanding of consequence (2012).” It provided me with a number of insights about causal relationships. I have continued to read “Experimental and quasi-experimental designs for generalized causal inference (2002),” which also addresses causal inferences. The former book is more conceptual and philosophical—also practical—, whereas the latter is more scientific in that it addresses specific research designs to find causal patterns.

As a scientist, causal relationships is a significant and inevitable topic. Thus, I will continue to read both books to enhance my philosophical and scientific understanding of causal relationships.
15:37, Saturday, 11/25/2017

1771. 時間感覚と人生観・死生観

夕方の五時半を迎え、辺りは真っ暗となった。今日は、自分の関心の赴くままに論文を読み、書籍を読むような日であった。

同時に、自分の内側に湧き上がってくる思念を絶えず捕まえ、それを文章の形にしていくことに従事しているような日であった。そんな土曜日があってもいいだろう。

昼食前に作曲理論に関する学習を少しばかり進め、夕食後に二本の論文を読んだ後に、再び作曲理論の学習に取り組みたい。毎日少しでもいいので作曲に関する探究を進めていると、必ず小さな発見と進歩がそこにある。発見と進歩の喜びは、私の日々の生活になくってはならないもののようにだ。

先ほど、一つ重要な気づきを得た。文章を書いている時、書き始めの際に仮に一つ主張のようなものがあれば、それを展開・発展させる形で自分の文章があるべき形になっていくことに気づいた。この気づきそのものは以前からあったものだが、実はこの構図は作曲においても全く同じなのではないか、という気づきを得たのである。つまり、文章における一つの最小単位の主張はモチーフとして曲の中に現れる。自分を惹きつけてやまないモチーフを微細な差異を含ませながら繰り返し、それを展開・発展させていけば一つのまとまりのある曲になるのではないか、という考えが浮かんできたのである。

ここから私は、今の自分に求められているのは、優れた曲全体を眺め、その全体性を参考にするのではなく、全体を構成する一つ一つのモチーフに注意を払い、そこに範を求めることだと思うに至った。優れたモチーフの要件を明らかにし、そのモチーフをいかに展開・発展させていくのかの方法を学んでいくのである。その際に、楽譜という生きた題材を用いていくことが何よりも優れた方法だろう。

モチーフへの意識を強く持ち、様々なモチーフの種類とその発展方法を自分の中に蓄積していきたいと思う。そうすれば、自分なりのモチーフを生み出し、それを独自の方法で発展させていくことがいつか可能になるだろう。

以前にも書き留めていたように、これからの10年を通じて、自分の文章や作曲はどのような姿になっていくのだろうか、ということに関心がある。自分の内側にある日本語と英語という自然言語、そして音楽言語はどのような変容をこれからの10年で経験していくのだろうか。考えても仕方のない想念

に取り憑かれながら、10年後の自分の言語世界について思いを巡らせる。それはそのまま、10年後の自己を想起することに他ならない。

10年後の自己へまなざしを向けながら、時間感覚というのは人生観や死生観と密接に繋がっているものだという考えに行き当たる。欧州での生活を始めて以降、自分の時間感覚は随分と変化した。それはすなわち、自らの人生観や死生観が変化したことを表しているのではないか、という考えが生まれてくる。両者の因果関係を特定することは難しく、少なくとも相関関係があることはわかる。

果たして、両者の因果関係は一方向的なものなのか、双方向的なものなのか。すなわち、時間感覚が変容すれば人生観や死生観が変容するのだろうか、それともその逆か、はたまたその両方なのか。今のところの私の回答は、双方向の因果関係を認めるものだが、因果の度合いは二つの矢印の間で異なっているように思う。

欧州で日々を過ごす中で思うのは、時間感覚の変容は人生観や死生観に強く影響を与え、人生観や死生観の変容は必ずしも時間感覚の変容を促すとは限らず、さらにその度合いも弱い傾向にあるのではないかということである。

私たちは日々の偽りの忙しさに飲まれ、自らの人生観や死生観を見つめる機会をなかなか持つことができない。仮にそうした機会を持つことができたとしても、人生観や死生観を変えることに躍起になる。しかし、そうした試みが往々にして功を奏しないのは、根幹にある時間感覚を見つめ直していないからではないだろうか。

今この瞬間の時間の中に宿るもの。今の自分を取り巻く時間の流れ。そうしたものに意識を当てることの重要性は、これまで何度も形を変えて書き留めているように思う。自己を取り巻く時間、自己の内側を流れる時間、今この一瞬の時間を見つめ直すことの重要性をここでもう一度強調したい。

2017/11/11(土)17:55

No.416: Research on Aesthetics

I will conduct research on aesthetics someday. More specifically, I will explore the underlying philosophers and existential or spiritual themes of great art works.

I plan to apply a specific literature review method to diaries and letters of composers and painters whom I admire. Mozart, Beethoven, Schubert, Grieg, Chopin, van Gogh, and Munch are my subjects. I just wrote it down because I could envisage that the day to conduct such a study would definitely come. 15:46, Saturday, 11/25/2017

1772. 昨日の日記について

今朝は五時に目を覚ましたが、実際に起床したのは六時だった。夢の内容は一切忘れてしまっているが、夢から覚める瞬間に、夢自体が何か危険なことが起こる場所を示してくれた。それは、そちらの方向には行ってはならないことを示す夢だった。

目を覚ました瞬間、自分がまるで日本にいるかのような錯覚に陥っていた。数秒ほどその錯覚が続き、自分は東京にいるものだと思っていた。だが、数秒ほど経つと、錯覚から覚め、自分がオランダにいることに気づいた。

目覚めた瞬間の寝室はとても寒かった。今夜からは寝室の暖房を入れて寝る必要があるかもしれない。

ここ数日間、確かに夢を見ており、起床直後にその断片の印象が自分の内側にあるのだが、その内容を詳細に思い出すことができない。詳細に思い出すことができる夢とそうではない夢の差は、いったいどこから生まれるのだろうか。

昨日は随分と数多くの日記を書き残していたように思う。正直なところ、毎日が何か無我夢中な形で進行していく。そうした内側のリズムに寄り添う形で文章を書き留めているため、自分がどれほど文章を書き残しているかはほとんど意識していない。しかし、昨日を振り返ってみると、数としては七つほど、文字としては10,000字ほどの日本語の日記を書き残していた。普段は平均して四つほどの日記しか書いておらず、多くとも五つの日記に留まるのだが、昨日は随分と多くの日記を書き残していたことに気づく

知らず知らず文章を書き、気づけばそのような分量の文章を書き記していた。私は、考えながら書き、書きながら考えることしか進む術を知らない。書き残しておきたいことが山ほどあり、それらの中

から文章になろうとするものだけを選んで書いているつもりでも、気づかないうちに昨日は多くの文章を書いていた。

昨日は、随分と多くの学术论文を読み、作曲理論の専門書を読んでいた。合計すると、六時間ほど読書を行っていたような気がする。一方、それと同じぐらいに、あるいはそれ以上に書く時間の方が長かったかもしれない。感覚として、読むことよりも書くことの時間が多い方が精神の健全性が保たれる。一時期は一日に、読むことに十時間ぐらい充てていることがあったが、振り返ってみると、それはあまり探究の濃度が高くないように思える。やはり、文章を書くということ、自分の言葉で探究内容を絶えず咀嚼しながら進むことが一番のようだ。

今朝は昨日の朝よりも闇が深いように思えるのは気のせいだろうか。日中目にすることのできる赤レンガの家々の姿は、闇で覆われているために見ることができない。その代わりに、まばらに置かれた街灯の黄色い光だけが見える。今日も光のある方へ歩いていく。2017/11/12(日)06:47

No.417: 3+3+3 or 4+4+4

I think that if I can spend three hours in each activity that contains scientific research (academic writing), keeping a journal (essay writing), and music composition, that is an ideal life for me. If I can spend four hours instead of three, that would bestow extraordinary happiness and joy on me. I convince that I can lead such a life someday soon.

My life is saturated with just writing, writing, and writing, and just creating, creating, and creating. Such a life is absolutely realizable. 15:55, Saturday, 11/25/2017

1773. 学びと美

今日は午前中に、来年の六月にロンドンで行われる学会の応募資料のドラフトを完成させようと思う。一昨日の段階でそれを完成させようと思っていたのだが、結局ドラフトの作成に着手することなく二日が経った。一昨日は、日本のとある人材会社が発行している月刊誌に載せていただく寄稿文のドラフトを執筆していた。そちらに関してはドラフトが完成し、今日の夕方にでもドラフトをレビューし、完成原稿を担当の編集者に送りたい。

ロンドンで行われる学会の応募資料に関しては、四ページほどのものであり、大した分量ではないが、その分何をどれほど盛り込んでいくのかという選択を迫られる。今回の学会では、昨年に行った研究の結果を発表しようと思っている。その時に作成した論文はかなりの分量であるため、今回の学会の特徴と照らし合わせながら、うまく四ページほどの分量にしていく必要がある。午前中は真っ先にドラフト作成に取り掛かりたい。

昨日、学びというのは、つくづく官能的な体験であり、爆発的な体験だと思った。官能性や爆発性が学びの本質であり、そうした感覚を引き起こさないものは学びではない。教師や指導者の重要な役割の一つは、学習者の内側に内在的に存在しているそうした感覚を引き出すことにあるだろう。

コンテンツとしての知識をいくらこちらから投げかけようとしてもほとんど学習効果はなく、コンテンツの提供に関する工夫を凝らすことは不毛だとは言わないが、それよりも、学びが本質的に持つ官能性や爆発性を学習者に体験させる工夫をした方がいいように思える。

学びの過程の中で、ある種の恍惚感を得られることができれば、学習者は学ぶことの虜になるだろう。そうした状態になれば、こちらから知識を投げかける必要などほとんどなく、私たちは学びに伴う喜びに従って、自発的に自分の学びを進めていくようになるはずだ。

教育科学の論文などを読んでいても、いかに学習効果を高めるかの手法についての研究が数多くなされているが、そうした論文には、どうも上記のような視点が欠けているように思えて仕方ない。また、教育に携わる実践者も同様に、いかに学習コンテンツを効率的に学習者に届け、学習者がそのコンテンツをいかに効果的に学ぶのかについての探求に余念がない。しかし、学習が持つ本質的な特徴は、そうした効率性や効果と呼ばれるものに還元できないものを持っていることを忘れてはならない。

昨日、私が体験していたのはまさに、効率性や効果という言葉が入り込む余地のないほどの恍惚さであり、歓喜であった。そうした官能的かつ爆発的な感覚の中で、昨日も時間が過ぎていった。

学びに潜む恍惚感について考えていると、どうしても美的な何かがあるのではないかと感じてしまう。学びに潜む美というのは、ここ最近浮上した考えであり、この考えが契機となり、美学につい

での探究を近い将来に始めていきたいと思うようになっている。「学びと美」さらには、この関心を敷衍し、「人間発達と美」というテーマを持って今後の探究を進めていきたい。2017/11/12(日)07:23

No.418: Transcendental Pure Joy and pleasure

I will lead my life with continuous creation. Like a child does, I feel pure joy and pleasure when I am creating something (e.g., writing academic an article, keeping a journal, and composing music). Yet, I have to engage in that kind of ceaseless creation with self-discipline and devotion.

My life can be filled with transcendental pure joy and pleasure, which lead to true happiness and well-being. 16:21, Saturday, 11/25/2017

1774. 日々の探究量について

昨日の探究領域と探究時間などを振り返っていると、つくづく私は、自分が複数の探究領域を横断し、一つの領域についてはそれほど多くの時間をかけていないことがわかる。確かに、人間発達と学習ということが全ての探究の根幹にあるのは間違いないが、昨日は三つか四つの探究領域を横断していたように思う。そこからわかるのは、一つの探究領域には、三時間から四時間ほどの時間を充てていたことだ。

人間には集中力が持続する時間というものがあり、いくら気力に満ちており、対象に没頭していたとしても、やはりある一定程度の時間で集中力が途切れるのではないかと思う。昨日は早朝の六時から夜の十時までを探究に充てており、食事や仮眠などの時間を除けば、およそ12-13時間ほど探究活動に従事していたと言える。

複数の探究領域を横断する過程の中で、絶えず文章や曲を生み出すという創造行為に従事していると、それだけの探究活動に従事していても、一日の終わりに疲労感は一切ない。おそらくそれ以上の探究時間になると、創造行為による没入感が嘘のように消え、突然疲労感を感じる領域に足を踏み入れてしまうことになる。

数年前に米国にいた時は、どの探究領域にどれだけの時間を費やし、一日に合計でどれだけの探究活動に従事していたのかを可視化するために、エクセル上でデータ管理をしていた。今はもう

そのような習慣はないが、昨年から探究拠点を欧州に移して以降、米国に記録していたデータの数字を思い出しながら、どれだけの時間を探究活動に費やすと、創造行為に伴う恍惚感が疲労感に変わっていくのかを経験的に把握するような試みを無意識に行っていた。

自分の中には、探究活動に伴うある一線が存在していることを認識しており、それを超えないように日々の探究時間を概ね一定のものにしている。その概算値が12-13時間というものだ。10時間を下回る探究時間の場合、食事を一食抜いた感覚となり、探究に関する空腹感のようなものが生まれてしまう。一方、探究時間が14時間を超えてくると、三食の食事にさらに一食が加わるような感覚があり、満腹感のようなものが生まれてしまう。

昨夜もそうであったが、夜の十時に就寝する際に、明日の始まりと明日の探究を待ち望むような気持ちになるためには、空腹感や満腹感を感じてはならず、探究に伴う恍惚感の余韻を残した程よい状態のままその日を終えていくことが重要だ。その重要性は、探究におけるいい塩梅を見つけることだと言えるかもしれない。

昨日の探究活動を振り返ってみた時に、まるっきり異なる領域があり、仮に同一の領域であったとしても、その領域内に存在する異なる複数の分野を探究している自分がそこにいた。大きな分類で言えば、それは学術研究、研究成果をもとにした実務、そして作曲となる。それら三つの活動の中に複数の領域がさらに存在しており、そうした多様な領域を行き来して毎日を過ごしているのが今の自分の姿だ。おそらく、それは自分にとって毎日の理想的な過ごし方であり、そうであるがゆえに、充実感や幸福感を日々の生活の中で感じているのだろう。

先ほど、数年ぶりに性格類型論のエニアグラムに関する文献を眺めていた。すると、今の私のタイプが健全な方向に向かっており、既存のタイプと新たなタイプが統合の時期を迎えていることに気づいた。自分の中にある性格類型の動きは、確かに欧州での探究姿勢に如実に表れているような気がしてならない。2017/11/12(日)07:57

No.419: A Rainbow-Like Piece of Music

I had a beautiful dream last night. A rainbow-like piece of music showed up in the dream. It was like Chopin's music, but it was not made by humans. It seemed that it came from nature or the

transcendental realm of reality. All I could do was just see the changing melodies and colors of the music. The music implied that I was none other than the music.

I am a protean and kaleidoscopic being. I am constantly changing over time. The music that I listened to and saw in the dream last night told me the essential aspect of my existence. 07:49, Sunday, 11/26/2017

1775. 少人数教育の恩恵

一日、また一日と日が暮れる時間が早くなっていく。今日は夕方の五時を過ぎる頃には、辺りはもう真っ暗になっていた。

昨日と同様に、今日も計画通りに仕事ははかどる一日だった。午前中に、来年の六月にロンドンで開催される国際学習科学学会に発表者として応募するための書類のドラフトを完成させた。現在研究アドバイザーを務めてくださっているミヒヤエル・ツシオル教授からの勧めもあり、4ページほどの短い論文発表用のセクションに応募することにした。もう一つ8ページほどの論文発表用のセクションがあったのだが、今回の学会へ発表用の論文を提出すると、今後どこかのジャーナルにその研究に関する論文を投稿できなくなるという著作権上の問題があったため、あえて短い方のセクションに応募することになった。

昨年の研究論文は、二つのテーマを同時に扱うようなものであり、それを二つに分けて一つの査読付き論文を執筆することが可能なのだが、それでも一つのテーマを4ページに収めるのは容易ではなかった。引用文献のリストを含めて、わずか4ページの論文を執筆したのは初めてであった。とりあえず、最重要なメッセージと重要な発見事項を盛り込む方向で文章を完成させた。昼食後にもう一度フォーマットや誤字脱字などを確認し、そのドラフトをツシオル教授に送った。

ちょうど明日、ツシオル教授のオフィスを訪れることになっている。明日から、今年の研究に関するツシオル教授からの指導が始まる。本格的な一対一の指導が始まるのは、来年の春頃からだが、その前に研究テーマに応じて一人の教授に対して何名かの学生が指導を受けるコースが明日から始まることになっている。昨年在籍していた発達心理学科においては異なる制度を採用しており、九月の最初からサスキア・クネン教授との一対一の指導を受けていた。

今年在籍しているプログラムと昨年のプログラムにおいて、修士論文にかかる単位数が異なるため、今年の教育科学学科においては上記のような仕組みを採用しているのだろう。明日からは、友人のハーメンと二人でツシヨル教授から指導を受けることになる。

元教師のハーメンの関心は、ゲーミフィケーションと教育というテーマらしく、私もゲーム的な様子を教育に導入することの意義と効果に関して強い関心を持っている。あいにく、現在はそこまで研究テーマを広げることができないため、ハーメンとの対話によって、そのテーマについての理解を深めていきたいと思う。

他のグループを見ると、四、五人の学生が一人の教授から指導を受けるようであり、ツシヨル教授から指導を受けるのは私たち二人だけであるというのは、非常に贅沢なことだと思う。ツシヨル教授とは、ハーメンとの指導のみならず、学会発表や査読付き論文に関しても何かと助言と支援をいただいている。これからプログラムが進行していくに応じて、ツシヨル教授との関係性はより深くなっていくだろう。

現在、研究に関して少人数制の贅沢な指導を受けていることに思いを巡らせていると、そういえば先日の一つ驚いたことがあった。次の学期に履修する二つのコースについて、どれくらいの受講者がいるのかを何気なく確認してみたところ、驚いたことに、「システムティックレビューの執筆方法」のコースは私を含めて三名、「応用研究手法」のコースに至っては私を含めて二名だった・・・。

受講者の人数を見たとき、正直なところあまりの少なさに驚いたが、逆に非常に贅沢なコースだと考えることができる。どちらのコースも高度な内容を扱うため、こうした少人数で講義を受けることができるのはとても有り難い。しかも、それぞれのコースは二人の教授が担当しており、教授の人数に対する受講者の比率が極めて高い値になっている。前の学期に履修していた三つのコースの内、一つは5名という少人数のものもあったが、残りの二つのコースはそれぞれ45名と60名ほどの受講者がいた。

友人のハーメンと私は所属学科が異なるため、ハーメンは今学期私と同じコースを履修していないようであり、火曜日から始まる上記の二つのコースに参加するその他の受講者がどいった顔ぶれなのか、今から非常に楽しみだ。2017/11/12(日)17:38

No.420: Idiosyncratic Colors and Fractal Dimensions of Music

I will attend a concert tonight. Maria João Pires will come to Groningen and play piano.

The dream that I had last night was like a prophecy of the concert. I may have clairvoyance. The concert tonight will be definitely spectacular and unforgettable.

I will just write down the implication of the dream last night. The polychromatic music implies that a piece of musical work contains inherent and unique colors. In addition, the wave patterns of each music have distinctive fractal dimensions.

I want to conduct research on idiosyncratic colors and fractal dimensions of music in my near future. 08:00, Sunday, 11/26/2017

1776. 反復と差異と美

闇の中に響き渡る雨の音と共に終わりを迎えていく日曜日の夜。明日からはまた新しい週が始まる。

今日は一日中、ラヴェルのピアノ曲を聴いていた。つくづく自分は繰り返しが好きなのだと思うされる。単純な繰り返しが好きなのではなく、意識を凝らした際に感知できる差異をわずかに含んだ繰り返しが好きなのだ。日々の生活もまさに、そうした差異をわずかに含む繰り返しだと言える。

諸々のことが全て繰り返しの中でなされていく日々を生きていると、時に繰り返しに対する異常なまでの執着に対して、自分自身でも驚き、呆れることがある。それほどまでに私は繰り返しを好む傾向にあるようだ。

結局今日は、二時間半ほどのラヴェルの曲を七回ほど聴いていたことになる。ダイナミックシステムの要件の一つに反復性が挙げられるが、まさに自分がダイナミックシステムの要件を満たした生き物であることを伺い知ることができる。

先ほど、イタリアの作曲家ムツィオ・クレメンティの楽譜を休憩がてら何気なく眺めていた。繰り返しが生む美がそこにもあった。

繰り返しが好む傾向と音楽への耽溺というのは密接につながっているかもしれない。というのも、音楽には繰り返しが不可欠な要素であるからだ。どのような曲の楽譜を眺めていても気づくが、そこには反復性があり、その反復の中に微細な差異が存在している。反復性と差異が相まって生み出す美に対して、私はたまらないものを感じているのかもしれない。

午前中に学会の発表へ向けた論文を執筆している最中、取り掛かる腰は少し重かったが、実際に取り掛かってみると、論文を執筆することの大きな喜びに触れた。私は笑いながら、やはり自分は学術論文を書くことが心底好きなのだと思います。いや、論文のみならず、結局自分は文章を書くことが好きなのだと思います。それも、誰かに強制させられて書くような文章ではなく、徹頭徹尾、自らの内発的な欲求に基づいて文章を書くことが好きなのだ。

理想を言えば、いつか自分の内発的な欲求だけに従って文章を書き続けるような生活をしたいと思う。文章を書くことを依頼されたり、強制されたりするのではなく、自分の魂が望むままに文章を書いていくのである。ただし、とりわけ学術論文の執筆に関して、研究者しか読まない文章の価値がいったいどれくらいあるのかについて再び考えていた。もちろん、研究者の中で論文が読まれ、それが他の研究者の研究に活かされるのであれば、少なからず価値があると言えるだろう。

しかし、それが研究者から研究者への影響にとどまっているだけでは、何とも言えない物寂しがある。結局自分は、研究者としての研究そのものと研究の成果をどのようにこの世界に還元していけばいいのかについて、まだ明確な答えを持っていないようなのだ。どこかふっ切れず、悶々としたものを私はまだ抱えている。

毎日日記を書くのと同じようなことが、学術論文の執筆についても起こりうるだろうと予感している。しかし、それはまだ予感に留まっており、何か引っかかりのような、しこりのようなものが自分の内側にあることは間違いない。科学研究とは一体何であり、その本当の意義と価値は一体何なのだろうか。それらの問いとはまだまだ向き合い続けていかなければならない。何がきっかけとなってそれらの問いに対する回答がもたらされるのか皆目見当がつかないが、見えないながらも毎日歩き続

けていかなければならない。反復の中に絶えず差異を見出し続けていれば、いつかその日がやってくる信じていたい。2017/11/12(日)20:54

No.421: Composition Practice Like Solving a Chess Problem

I think that every great composer has idiosyncratic and implicit theories of music compassion. Literally, they are invisible, but they can be traced and analyzed in a certain way. I will attempt to elucidate those concealed theories. For instance, I will train myself to predict what kinds of note will come next in a specific measure in a piece of work that a great composer created. This practice looks like solving a chess problem. Everyday, I will practice it at least for a measure in a piece of work. This practice will be beneficial to detect implicit composition theories of great composers and to create my own theories. 12:51, Sunday, 11/26/2017

1777. 過ぎ去った閃きと創造学習

今朝はいつもより遅く、七時過ぎに起床した。目を覚ました時刻は、辺りが少しずつ明るくなっていく頃であった。七時半過ぎから今日の仕事を開始しようとしたところ、昨夜に見た夢についての回想が始まった。それは「見た」と表現されるよりも、「知覚された」と表現した方が正確かもしれない。実際に、夢の映像については何一つ覚えていない。ただし、夢の中で生じていた強烈な感覚が記憶に残っている。

夢の中で私は、文章を書くことに関する膨大なエネルギーを注入されているかのようなようだった。今朝の目覚めがいつもより遅かったのは、この夢によって一度目を覚ましていたことと関係しているかもしれない。

早朝の未明に目を覚ました時、自分の内側に湧き上がっていた重要な考えを文章としてパソコン上で書き留めているような錯覚に陥っていた。その時の私は、いくつもの湧き上がってくる考えを、必死にパソコン上で書き留めているつもりだったが、起床してみると、やはりそれは錯覚であったに過ぎないと知った。特に、二つか三つほど何か非常に意味のあることを自分が書き残そうとしていたことだけを覚えている。その内容については一切わからない。だが、何か重要な閃きがあり、その閃きを文章として形に残そうとしていた自分がいたことは確かである。

今朝はここ二日間とは打って変わり、ほのかに青い空が広がっている。昨日と同様に、相変わらずラヴェルの曲を今日も聴いている。玉虫色の曲が流れてくるたびに、それは今日の前に見える淡い空を暗に象徴しているように思え、曲と共にその空に溶け込んでいってしまいそうな感覚になる。

遠い空は分厚い雲に覆われており、フローニンゲンの街の上空の空はそれほど雲がない。雲の流れる速度はゆったりしているように見えながらも、雲は堅実な速度で進んでいく。今日も少しばかり天気が変わりやすいかもしれない。

今日は午前中に、現在履修中のコースとは全く関係なく、自分の関心の赴くままに、教育科学に関する論文を何本か読んでおこうと思う。一つは、「創造学習」と形容してもいいであろう新しい発想に基づいた教育のあり方に関する論文だ。創造学習とは、文字通り、創造しながら学習するという学習方法である。ジョン・デューイの「実践学習 (learning by doing)」という発想も多大な共感を私に引き起こすのと同時に、創りながら学んでいくという創造学習の意義を自分自身が毎日身を持って経験しているため、この学習方法の設計については強い関心がある。

創造学習に関する論文を読んだ後は、MOOCに関する論文を三つか四つほど読みたいと思う。論文をある程度読んだら、昼食前に、日本のとある人材会社に寄稿する文章のドラフトを再度レビューし、レビューが済み次第、担当の編集者の方に送っておきたいと思う。数日間ほど文章を寝かせておいたため、ここでレビューをして特に問題がなければ、それを最終稿としたい。午後からも論文を読むか、作曲理論の学習を少し行い、三時過ぎに自宅を出発し、三時半から論文アドバイザーのミハエル・ツシヨル教授とミーティングを行う。

このミーティングはこれから毎週、友人のハーメンと共に行われるものであり、昨夜メールを確認すると、ツシヨル教授のオフィスではなく、より開放的な学内のカフェでミーティングをすることになった。ハーメンも私も、すでに自分の研究に関するアイデアがあり、これから毎週どのような形でミーティングが進んでいくのか非常に楽しみである。今日も何か充実した一日であるという予感がする。2017/11/13(月)08:01

No.422: Elucidation of Implicit Music Theories in a Somatic Sense

How can I build my own theories for music composition?

One of the methods would be discovering implicit music theories of great composers through analyzing their works. Here, the key would be grasping them not only in a cognitive sense but also in a somatic sense.

I have to comprehend hidden theories cognitively and physically. Especially, this kind of somatic understanding would be consequential.

The fundamental purpose of grasping implicit music theories is that I can actually apply them to my music composition.

Theories without somatic understanding is futile. That is why I need to elucidate implicit music theories not only in a cognitive way through reading a text but also in a somatic sense through actually composing music. 13:05, Sunday, 11/26/2017

1778. 成績評価に関する夢と言語空間の柔軟な変化

起床してから少しばかり時間が経ったところで、昨夜の夢の断片的な記憶が思い出された。一つ覚えているのは、自分が大学の成績表のようなものを提示されていたことだった。ここで「提示」と述べたのも、紙のかたちで成績書を受け取るのではなく、目の前の空間に成績の一覧が投影される形で成績を見ることになったからである。

目の前の空間に映し出された成績を見ると、科目が全て英語かオランダ語で表記されており、横に5段階評価の数字が振られていた。前の学期に履修していたコースの内、期末の論文によって成績が評価されるものは、5の成績評価が付されており、自由記述式試験の一つの成績が2であった。後者の数字を見たとき、「追試を受ける羽目になったのだろうか」と少しばかり不安な気持ちになる自分がいた。投影された成績一覧のさらに下の方を見ていくと、音楽に関しては、最低評価の1が付けられており、とても微笑ましく思った。その他にも、私の知らないオランダ語の単語で表記された科目がいくつかあり、それらについてはまずまずの成績が付けられていた。

まさかこの歳になって学校の成績に関する夢を見るとは思ってもしなかったが、オランダの研究大学院における成績評価の厳しさに日々晒されていると、そうした夢を見るのも不思議ではない。そうい

えば、現在在籍している教育科学学科のコースと昨年まで在籍していた発達科学学科のコースは一つ大きな違いあることに気づいた。それはクラスの中で交わされるオランダ語の量である。

昨年は、在籍していたプログラムが全て英語で行われるという都合上、全てのクラスは英語で行われていた。さらには、教授に関してもドイツ人など他のヨーロッパ諸国の教授がコースを担当しており、受講者もドイツを中心に、様々な国からやってきた者たちで構成されていたため、クラスの中でオランダ語が話されることは一度もなかったように思う。一方、今私が在籍しているプログラムのコースも、原則は全て英語で行われるものなのだが、オランダ語がクラス内で飛び交うことがよくある。

それはおそらく、教育科学学科のプログラムの中で英語で行われるプログラムを選択している者は少なく、他の人たちはオランダ語で行われるプログラムを選択しており、彼らとクラスが同じになる場合には、仮にそのコースが英語でなされるはずのものであったとしても、ついつい母国語のオランダ語が口から出てしまうのだと思う。

前の学期に履修していた三つのコースの内、二つのコースは、教授に対する質問であればオランダ語でもいいというような前提があり、受講者の中には英語ではなく、オランダ語を用いて質問する者が何名かいた。もちろん、私はオランダ語をほとんど理解できないのだが、昨年とまた違う環境に自分が身を置いているような実感があり、その変化を有り難く享受している自分がいる。

明日から始まる二つのコースの内、一つはチリ人のマイラ・マスカレノ教授が担当するものであるため、そちらはオランダ語がクラスで飛び交うことはないであろう。一方、「応用研究手法」に関するコースを担当するのは二人のオランダ人であるが、コースの履修者2名の内、私がオランダ語を話せないため、クラス内のやり取りは全て英語になると思われる。

明日からのコースはどれも少人数であり、日本人の私がいるため、オランダ語が飛び交うことは全くないであろうことが予想される。その場にどの国籍の人間がいるかによって柔軟に言語空間が変わるといえるのは、その中に身を置いているとある種の楽しさが芽生える。言語空間の柔軟な変化というのは、そうした楽しさ以外にも、おそらく重要な発見をもたらすものを持っているような気がしているため、その点に意識を当てて明日からのコースを履修したいと思う。2017/11/13(月)08:31

No.423: Musical Somatic Resonance

The gist of learning implicit composition theories of great composers is musical somatic resonance or musical somatic attunement, meaning that I become immersed in the music very deeply. To put it differently, musical somatic resonance is being in a profound realm of music, which enables us to grasp hidden intentions and philosophies of music.

Assimilating into inner dimensions of composers is the essence of musical somatic resonance, which is indispensable to grasping implicit composition theories. 13:21, Sunday, 11/26/2017

1779. 創造行為を通じた学習について

今日は午前中にいくつかの論文を読み、一つ大変感銘を受ける論文があった。それは、「創造学習」に関する論文である。非常に短い分量の論文であったが、私がこれまで考えていたことを代弁してくれるような内容であった。偶然にも、来年客員研究員として所属しようと思っている大学でその論文の執筆者が研究活動を行っており、昼食前にその研究者へメールを送った。主には、論文に対する感想と来年にその大学に所属することになった際の協働研究の可能性についてである。

教育哲学者のジョン・デューイが指摘しているように、教育の目的とは、単に学習者に学習習慣を獲得できるように支援することではない。むしろそれ以上に重要なのは、学習することの喜びを育んでいくことである、というデューイの主張は私の主張と同じである。

デューイは、実践を通じた学習の意義を提唱しているが、私はさらに、その論文で紹介されていたように、創造行為を通じた学習の意義を主張したい。人は確かに実践を通じて多くのことを学び、むしろ実践を通じてでなければ多くのことを学べないとさえ言えるだろう。そうした観点において、デューイが提唱する実践学習とでも形容できる発想は非常に大事である。一方、学習することに伴う喜びという現象に着目した場合、単に実践に着目するだけでは、学習と、学びに伴う喜びとの関係が見えづらいように思える。

そこで私が考えていたのは、まさに創造行為を通じた学習の意義であった。創造行為の表現物はどのようなものであってもいいと思う。それは楽器の演奏でもいいだろうし、文章という形でもいいだ

ろう。あるいは、方程式の立案というのも立派な創造行為の産物である。創造行為を通じて得られた表現物がどのような形を持つにせよ、学習過程において、創造行為に従事する楽しさと喜びを涵養するような教育哲学とその方法があつてしかるべきだと思う。

実際に日々私が研究活動や作曲実践に取り組んでいるのも、文章や曲という創造行為の産物を生み出す喜びや楽しさを実感しているからに他ならない。文章を執筆することにせよ、曲を作ることにせよ、冷静になって考えてみても、創造行為に伴う内在的な喜びと楽しさ以外のものは、それほど的重要性を持っていない。

学ぶことに伴う学習者の内在的な喜びや楽しさを涵養することは、子供の教育においても、成人教育においても極めて重要だろう。学びというのは苦行であつてはならず、それは本質的に充実感や、究極的には生きる喜びのようなものを喚起するものだと考えている。

子供の教育においても、成人の教育においても、これほどまでにテクノロジーが進展しても、さらには教育研究によって多くのことが解明されつつある現代社会においても、未だにほとんどの学習者は、学びに伴う内在的な喜びと楽しさを味わえていないのではないかと危惧している。そうした問題に取り組む一つの道を、この論文は示唆しているように思えた。そうしたこともあり、著者に連絡を取り、今後縁があつて協働研究ができれば幸いだ。

創造学習というテーマを探究する際に、教育哲学や美学に関する発想の枠組みが要求されるかもしれない。「人は創りながら学び、創りながら発達する」というテーマを一つの重要な探究の柱にし、このテーマを探究する過程の中で、教育哲学や美学の領域を少しずつ開拓していこうと思う。2017/11/13(月)18:17

No.424: Record of My Finding for Music Composition

From today, I will keep a journal for my experience of musical somatic resonance that occurs during my music composition. This is an imperfect and incomprehensive memo, but it will be valuable sources for my theory building. However trivial or even incorrect my finding is, I will keep a record of it.

I am very avaricious for building my own theories for music composition from scratch. I will be able to see a gigantic system of my theories someday. 13:29, Sunday, 11/26/2017

1780. ミハエル・ツシオル教授の指導より

午後三時を迎えた時、フローニンゲンの空は秋の深さを物語っていた。天上から地上に降り注ぐ太陽の光も弱く、秋の深さを実感する。

三時を少し過ぎた後に、今年の研究に関するグループミーティングに参加するために自宅を出発した。このグループミーティングは、論文アドバイザーのミハエル・ツシオル教授の指導のもとに行われる。偶然にも、友人のハーメンもツシオル教授から指導を受けることになり、このミーティングは顔を知った三人で行われることになった。今から隔週で数ヶ月間ほど、ツシオル教授の指導のもと、この三人でグループミーティングを行い、各自の研究を進めていくことになる。

ミーティングの場所は、ツシオル教授のオフィスではなく、学内のカフェで行うことになった。学内にはいくつかカフェがあるが、私が最も落ち着けるカフェがミーティングの場所になっており、ミーティングの参加の前から不思議な高揚感があった。

待ち合わせ場所に到着すると、すでにハーメンが席を確保していた。ハーメンの話によると、午後一番にクラスがあり、そのクラスの後にこのミーティングがあるとのことだった。ハーメンと私は、今学期に履修しているコースについてしばらく話をしてきた。すると数分後に、ツシオル教授がカフェに到着した。

このミーティングがどのような形で進められていくのかについては、事前に一切の情報がなかったため、具体的に何をどのように行っていくのが曖昧な印象を持っていた。ミーティングが始まってみると、そうした心配はすぐに杞憂に終わった。

最初にツシオル教授から、数ヶ月間にわたるこのミーティングの趣旨とスケジュール、そして各回のミーティングで何を話し合い、そのための事前準備について詳細に説明してくれた。基本的には、ハーメンと私の研究をステップバイステップで進めていくためのミーティングであり、そのプロセスに従っていけば、研究論文を書き上げることができる形になっている。

このミーティングに関する概要を聞いた後、今日は一つエクササイズを兼ねて、私が数日前にツシヨル教授にレビューを依頼した論文について、三人でディスカッションすることになった。この論文は非常に短いものであり、来年の六月にロンドンで行われる学会用に執筆したものだ。

このディスカッションの意図は、要するに、私の論文を題材にし、科学論文の執筆に関する注意点やポイントについて、もう一度基本に立ち返ることにあつた。このディスカッションは、本当に実り多いものであり、私自身がもう一度、科学論文執筆の基礎を確認し、いかに自分の論文の中に曖昧な点が多く含まれているかに気づくに至つた。

二人からのコメントとフィードバックは、私自身の認識の枠組みの盲点を十分に明らかにすることに関して非常に有益であつた。ツシヨル教授も述べていたが、経験豊富な研究者であっても、誰しも必ず認識の枠組みの盲点があり、それを絶えず検証しながら論文を執筆していくのだと教えられた。こうしたことは頭の中ではすでにわかっていたと思つていたが、やはりそれすらも思い込みに過ぎず、実際に論文を執筆し、それに対して経験豊富な研究者から助言をもらうと、随分と基礎的な事柄を自分は見落としていたことに気づくものである。

過去数年間においていくつも論文を執筆する過程の中で、科学論文の執筆能力が年々向上しているのを実感していたが、やはりまだまだ未熟な点があると認めざるをえない。今後数ヶ月間にわたるミーティングを通じて、そうした未熟な点をできるだけ多く洗い出し、科学論文の執筆に関する技能をさらに向上させていきたいと思う。次回のミーティングもまた非常に楽しみである。2017/11/13 (月) 19:35

No.425: The Fryderyk Chopin Museum in Warsaw

I cannot repress my desire to visit the Fryderyk Chopin Museum in Warsaw. The museum is not so far from Groningen. I will visit it next April, bringing “Chopin’s Letters (1931).”

It suddenly started to rain. Intermittent rain in Groningen looks and sounds like one of Chopin’s piano works. I will definitely visit the museum to encounter Chopin and his works in a more profound dimension. 13:41, Sunday, 11/26/2017